



上野動物園のモノレールは、東京都交通局が日本車輛と共同で研究開始した上野式と呼ばれる独自方式により園内輸送施設の上野懸垂線として設置された。1957(昭和32)年開業。



空中の軌道

〔モノレール・新交通〕

文——窪田陽一 Kubota Yoichi ●埼玉大学大学院理工学研究科教授
写真——尾花基 Obana Motoi

『華氏四五二』という映画がある。題名は書物の素材である紙が燃え始める発火点の温度を意味している。空想科学小説家レイ・ブラッドベリが一九五三年に書いた、書物の所持や読書が禁じられた架空の社会における人間模様を描いた作品に基づいている。その中で、違法者の拘束と焚書(よんじょ)を任務とする取締官である主人公がモノレールを利用する場面がある。その男が下車する時、車両の床が地上に向かって開き、階段になるといふシーンである。懸垂式のモノレールならではの、駅舎を必要としない設計の着想に感心した。地上からの高さにもよるが、空中を走るバスの感覚に近いのかも知れない。大方のモノレールやその後に登場した新交通システムでは、旧来の鉄道と同じくプラットフォームで乗降する仕組みが多いが、鉄道の歴史と通念が空中の軌道



昭和に計画され平成に開通した神戸の六甲ライナー。河川沿いの空間を利用した路線選定。



京浜運河の中を首都高速道路と並走する東京モノレール。東京オリンピックの開催に合わせて1964(昭和39)年9月にモノレール浜松町駅(旧羽田駅)間開業。



昭和60年の開業当初、小倉駅から離れた所に起終点が置かれた北九州モノレール。その後、小倉駅まで延長され結節機能が高まった。

計画当初に想定されていなかった新しい交通施設である鉄道を導入する無理難題を敬遠したパロック都市の多くは、市街地縁辺部の終端駅で鉄道を止め、地下鉄で連絡する方策を選んだ。しかし高架鉄道を選んだシカゴ等では、日差しを奪われた街路沿道はアンダーグラウンド・シティと揶揄された。この轍を踏まないために、街路の交通混雑を緩和する公共交通手段として計画されたモノレールや新交通システムとしての導入に際しては、街路事業の促進が前提条件と

にも及んでいることになる。日本では鉄道が空中を走るようになったのは、ドイツ人技師の協力で東京駅の南北に一九一四(大正三)年に竣工した、東京市街高架鉄道の区間である。それに先立つ一九〇一年、ドイツのヴッパータールでは、世界で初めて本格的にモノレールを都市交通機関として整備し、空中鉄道と呼んだ。十九世紀後半から二十世紀初頭は、都市の立体化が進み始めた時期であり、空中の軌道は未来の現実化に一役買っていたのだ。今から丁度一世紀前、第一次世界大戦前後というきな臭い時代、欧米列強諸国は軍備を競いつつ、高速道路の敷設や自動車の改良、そして都市の立体的な開発を推進していた。シカゴやニューヨークに摩天楼を築いたアメリカが抜きん出たかのように見えるが、欧州でも創造力が豊かな人々が技術者を鼓舞した。ウィーン分離派とも呼ばれるゼツェツション、その影響を受けたアルデコやアール・ヌーボー、イタリアの未来派等は、何れも芸術運動と見られているが、地下鉄の駅舎や高層建築、高架鉄道の意匠にも彼らの造形思想の影響は及び、場所のアイデンティティの形成に寄与した。自然の川や谷を超える橋梁と異なり、市

街地の中を通り抜ける高架鉄道は、専用の敷地を通るだけでなく、街路を跨ぐ必要が生じる。都市計画で街路網と整合するように初めから配置が検討されていれば問題は少なからうが、後から追加された路線では中々苦労することになる。街路とは異なる線形の論理を持つ軌道は橋脚を立てる位置に難儀する等、相性が悪い場合も少なくない。市街地の街路整備が進んでいない時代には当にそれが難問だった。計画当初に想定されていなかった新しい交通施設である鉄道を導入する無理難題を敬遠したパロック都市の多くは、市街地縁辺部の終端駅で鉄道を止め、地下鉄で連絡する方策を選んだ。しかし高架鉄道を選んだシカゴ等では、日差しを奪われた街路沿道はアンダーグラウンド・シティと揶揄された。この轍を踏まないために、街路の交通混雑を緩和する公共交通手段として計画されたモノレールや新交通システムとしての導入に際しては、街路事業の促進が前提条件と





埋め立て地に形成された市街地を縫う神戸新交通ポートアイランド線。愛称はポートライナー。1981（昭和56）年に三宮-ポートアイランド-中公園間が開業。



運転席の車窓越しに見た湘南モノレール。この狭い道によくぞ通したものである。1970（昭和45）年に江の島線の大船駅-西鎌倉駅間が開業。



なり、市街地の構造そのものが変容することになる。昭和日本はそれを未来都市への道と信じて推し進めた。空を飛ぶ鉄腕アトムはいつ実現するか分からないが、自立歩行ロボットが歩き回る未来都市の姿の一部はこの時現実のものとなった。

『華氏四五二』は、書物を愛する人々が各自選んだ愛読書を一冊丸ごと暗記し、読みたいと思う希望者に記憶だけを頼りに朗読する、というシーンで終わる。原作者ブラッドベリはテレビによる読書文化の破壊を懸念していたという。モノレールを見る度にこの映画を思い出し、人々の思考と記憶の力の行末を問われる思いがする。